

中高老年期野球競技者の受傷歴と年代別の運動器機能評価

順天堂大学大学院  
スポーツ健康科学研究科  
学籍番号：4119050  
氏名：井上 拓海

【目的】

中高老年期野球競技者の受傷歴と年代別における運動器の特徴を明らかにすること。

【対象・方法】

本調査は神奈川県還暦軟式野球連盟に所属する男性競技者に対し、アンケート調査と運動器の調査を異なる対象者で実施した。アンケート調査は、972名に対しオンラインによる調査を依頼し、回答の得られた241名（有効回答率24.8%）を対象とした。質問内容は、過去2年間に生じた疼痛発生部位、現在生じている疼痛発生部位等とした。運動器調査は、43名を対象にロコモ度テスト、下肢（股・膝・足）関節可動域テスト、筋柔軟性テストを実施した。

【結果】

アンケート調査では、過去2年間に2週間以上競技を中断した疼痛があった者は241名中91名（37.8%）であり、91名の疼痛発生部位の総件数は237件であった。身体部位の内訳としては237件中肩関節52件（21.9%）、腰部45件（19.0%）、膝関節38件（16.3%）の順に多かった。現在疼痛を生じている者は241名中181名（75.1%）であり、181名の疼痛発生部位の総件数は357件であった。身体部位の内訳としては357件中肩関節81件（22.7%）、膝関節70件（19.6%）、腰部67件（18.8%）の順に多かった。運動器の調査では、2ステップテストにおいて60代と比較し70代で有意に低かった（60代： $1.44 \pm 0.09$ 、70代： $1.36 \pm 0.08$ 、 $p=0.007$ ）。立ち上がりテスト（60代： $5.7 \pm 1.1$ 、70代： $5.2 \pm 0.9$ ）とロコモ25（60代： $1.1 \pm 1.7$ 、70代： $0.9 \pm 1.2$ ）において有意差はみられなかった。下肢関節可動域と筋柔軟性は全てにおいて年代別の有意差はみられなかった。

【結論】

中高老年期野球競技における過去2年間の疼痛発生部位は、肩関節だけでなく腰部や膝関節が多かった。また同年代の一般男性と比較し、運動器の機能が高いレベルで維持されている可能性が示唆された。